

平成29年度 実践研究報告書

馬路村立馬路中学校 教諭 川竹 三千代

1 平成28年度における研究の概要

昨年度は「中学校少人数学級におけるユニバーサルデザインに基づく授業づくり」を研究テーマとした。現在、一人一人の生徒の特性に応じてさまざまな指導体制を取ることが可能になった。しかし、小規模校では、生徒数が数名であったり、教員1名で教科経営をすることとなったりしたことで、指導体制の工夫が十分に行われていない場面が見られる。小規模少人数学級であっても様々な生徒が在籍している可能性があり、その場合、小規模であるがゆえに指導が焦点化しづらいという課題がある。そこで、小規模校少人数の学級において、ユニバーサルデザイン（以下UD）の視点を取り入れ、多層指導モデル（海津・田沼・平木・伊藤・Sharon 2008）を参考にし、一教科の授業改善を行った。

UDの視点とは、高知県教育委員会が作成した『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック』に掲載されている5つのポイントである。そこにはチェックリストとして20項目の具体的な支援方法が記されている。

昨年度の研究では、実態把握や授業改善を授業者と筆者が一緒に行った。そして、授業観察と質問紙により判明した課題を提示し、次の3点【Ⅲ活動内容の工夫】【Ⅳ教材・教具の工夫】【Ⅴ評価の工夫】を重点とした授業改善を試みた。介入期に生徒に実施した理解度・満足度・達成度のアンケートでは、学習内容や活動が明確であった授業においてはポイントが上がり、特に後半においては単元の特性と合わせてUDの効果が現れたと考えられた。小規模校であっても中学校では1つの学級に教科の数だけ教員が関わっている。実態把握を複数の教員で行い、日頃の実践を持ち寄ることによって学級や個に応じた指導方法を焦点化できると考えた。

2 平成29年度の実践内容

今年度小規模校に赴任し、保健体育科を筆者1名で教科経営することとなった。そこで体育の授業において、UDの視点を取り入れた授業づくりの実践を行うこととした。

対象は全校生徒（1・2・3年合計人数10名）とした。全校生徒による合同体育の授業である。異学年・男女混合の集団である。

授業の支援の方法としては多層指導モデルの集団指導（1st・2ndステージ）を参考に、UDの5つのポイントのうち、【Ⅰ環境の工夫】では「1時間の流れを視覚的に提示する」、【Ⅱ情報伝達の工夫】では「板書や絵、写真、具体物等の視覚的支援を活用する」、【Ⅲ活動内容の工夫】では「授業の進め方にパターンを決めている」「生徒同士が関わり合い、学び合い、教え合う場を設定する」、【Ⅳ教材・教具の工夫】では「ワークシートなどを活用する」、【Ⅴ評価の工夫】では「行動直後の評価や机間指導などで個別に賞賛や注意を行う」を実践をした。また、授業の中ではないが、安全面で技能習得の必要性のあるベースボール型の単元においては、夏休みに補習を行う等、個別指導（3rdステージ）を行った。道具（ラケット）を使うネット型の単元においては、初めて取り組む1年生においては、サーブ練習等技能習得の時間を確保する支援を行った（2ndステージ）。

2学期には、球技「アルティメット」において8時間の授業計画のうち、6限目の授業で研究授業を行い、高知県教育委員会「小規模・複式校における未来づくり推進校事業」指定事業に係る授業力チェックシートを実施した。

3 平成29年度の成果と課題

まず、年度当初の授業や部活動の様子や新体力テストの結果等より実態把握に努め、支援の方法を考えた。1学期には球技（バレーボール）において、2・3年生はゲームを楽しむことができる技術

の習得ができていないが、1年生はその段階に達していないという実態が見られ、どの学年においても満足感を味わう授業にするための支援が必要であることを実感した。そこで、馬路中では行っていない種目（アルティメット）を行った。どの学年においても道具（ディスク）を扱うことに関してはスタートが同じであることで、基本（投げる・受ける）練習においても飽きることなく行える。また、球技の経験年数が多い3年生には、1・2年生とは異なるめあてにし、ゲームをリードする役割を与えた。ゲームではチームの実態を観察し、次のゲームに生かす活動を行うようにした。その際、課題と作戦が記入できるワークシートを準備して、話し合いをスムーズに行えるようにした。以上が球技アルティメットにおける【Ⅲ活動内容の工夫】である。【Ⅰ環境の工夫】、【Ⅱ情報伝達の工夫】では視覚的な支援として、本時のめあて・流れ・基本のルールを掲示した。意欲の持続をねらって、毎時間行うコンテストの結果や、生徒の振り返りで記述された肯定的な内容等を取り上げ掲示した。その他にも生徒に伝えたい情報は、掲示するようにした。

今回の研究授業をきっかけに、授業の流れがパターン化され、以降の授業においても同じパターンで授業を進めている。また、環境や情報伝達の工夫を行うことで、授業者も見通しがもて、授業内容にぶれが生じることなく行える。途中での変更は生徒へ負担がかかることも考えられるので、変更のない授業を心掛けることができる。

このように、授業改善に取り組んだ結果、参観者の評価では他の項目に比べ教材研究や環境設定で評価が高かった（表1）。生徒の振り返りではどの項目においても肯定的な評価となり、満足感を味わえる授業となったと考える（表2）。今後は、参観者の評価が低かった授業構成、指導技術、生徒理解について、さらに効果的なUDの視点を取り入れ授業改善を行っていく。

〈参考文献〉

- ・海津亜希子・田村実敏・平木こゆみ・伊藤由美・Sharon Vaughn（2008）通常学級における多層指導モデル（MIM）の効果—小学校1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じて—教育心理学研究,56,534-357
- ・高知県教育委員会（2013）.『すべての子どもが「わかる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～』

表1 授業力チェックシート 参観者評価結果

要素	NO	質問項目	質問項目平均	要素平均
教材研究	1	系統性や生徒の実態(レディネス状況・各種学力調査の結果等)を踏まえて単元や授業を構成している。	4	3.8
	2	学習指導要領の指導内容に基づいたねらいになっている。	4	
	3	他教科との関連や地域の資源(人材を含む)活用、生徒の暮らしとのつながり等を意識して、単元や授業を構成している。	3.5	
環境設定	4	すべての生徒が、自ら課題解決に取り組めるような教室環境を意図的につづけている。	3.7	3.7
	5	学習時間を保証し、開始時刻と終了時刻をしっかりと守っている。	3.8	
授業構成	6	生徒にねらいをわかませ、課題意識をもたせている。	3.6	3.6
	7	教科の特質を生かした方法で自分の考えを表現できるよう、手立てを工夫している。	3.4	
	8	ねらいを達成するために「聞く・話す・伝えあう・書く」活動を大切にしている。	3.6	
	9	学習内容に有用感ももてる適用問題や評価問題を実施している。	3.8	
指導技術	10	学習内容に有用感ももてる適用問題や評価問題を実施している。	3.4	3.4
	11	板書計画に基づき、授業の流れや思考の過程がわかる板書になっている。	3.8	
	12	考えを深めたり広げたりすることができるよう、生徒の意見を価値付けたり、反応やつぶやきをつなげたりしながら授業を展開している。	3.3	
生徒理解	13	机間指導しながら生徒一人一人の考えを把握し、次の授業展開に生かしている(意図的指名等)。	3.3	3.5
	14	机間指導しながら、生徒一人一人の学習状況を把握し、個に応じた支援や声かけをしている。	3.7	
	15	あいさつ、言葉づかい、聞く姿勢等、教師が生徒の模範となるような態度で接し、信頼関係を築いている。	3.4	

(4:あてはまる 3:だいたいあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない)

表2 中学校生徒授業振り返り 結果

質問		そう思う	すこし そう思う	あまり 思わない	思わない
1	今日の授業では、これまでに学んだ内容や方法(他教科も含む)を使って考えることができた。	100%			
2	意図的に学習に取り組めるような、教材・教具等の工夫があった。	100%			
3	見直しをもって意図的に学習に取り組める「めあて」や課題があった。	100%			
4	相手や目的に応じて自分の考えと、その根拠を明確に整理し、表現することができた。	100%			
5	目的にそった話し合いや意見交流により、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた。	100%			
6	今日の授業で学んだこと(方法等)は、他の学習や普段の生活でも使えようと思う。	100%			
7	学習のまとめや振り返り(分かったこと・できるようになったこと・さらに考えたいこと等)を自分の言葉で表現することができた。	100%			
8	先生は、黒板に分かりやすく自分たちの考えや意見をまとめてくれていた。	100%			
9	先生は、自分たちの発言や活動などに対して、意味づけたり、価値づけたりしてくれた。	100%			
10	先生は、一人一人に応じた指導や助言を行ってくれた。	100%			